



高森湧水トンネル公園

土木施設×Reborn

公園として地域のシンボルとなった「高森湧水トンネル」

Takamori Yusui Tunnel: The Region's Iconic Park

熊本県高森町



特集 土木施設×Re
Special Features / Civil Engineering Facilities and Re

株式会社オリエンタルコンサルタンツ／都市政策・デザイン部
井村 優花 (会誌編集専門委員)
IMURA Yuka

高森湧水トンネル

「高森湧水トンネル」は、熊本市を經由し有明海に注ぐ一級河川白川の最源流に位置するトンネルである。その湧水量は常時毎分32t(日量約46,000t)を誇り、高森地域唯一の貴重な水源として、生活用水や農業用水等に利活用されている。水源地であるほか、全長2kmのトンネルのうち約550mが公園化されており、付近には資料館も併設され、多い時には1日6,000人が訪れる高森町の観光スポットの一つとなっている。

トンネルは、奥に進むに連れてイルミネーションが鮮やかになり、光と水の幻想的な空間が広がっている。水玉が不思議な動きに見える仕掛け噴水「ウォーターパール」があったり、突き当たりでは水源を間近で見ることができたり、季節のイベントも多い。また、トンネルの上にある水の資料館「湧水

館」では、水の大切さや地球環境の問題、高森トンネルの歴史について学ぶことができる。

しかし、もともと公園として作られたわけではなく、本来は鉄道のためのトンネルであったが、未完成に終わった。なぜ、鉄道が通ることなく公園となったのだろうか。

高千穂線とトンネル建設

高森トンネルの始まりは1896(明治29)年まで遡る。日清戦争直後、軍事産業路線として熊本～延岡間の鉄道敷設の話が持ち上がった。その後、1922(大正11)年に高森線の工事に着手したが、国の財政難で工事が中断されたため、熊本・宮崎・大分の関係者が「高千穂高森間鉄道速成同盟会」を結成し、建設促進運動を行った。

1928(昭和3)年になり、高森線の立野～高森間



トンネル坑口



高森～日ノ影間の路線概略図(資料を元に筆者作成)

(熊本)が開通し、1939(昭和14)年には宮崎県側が延岡から日ノ影(宮崎)まで開通したが、それより先の建設は戦争のため見通しが立たなかった。

戦後になって、熊本と宮崎を繋ぐ高森～日ノ影間の路線建設が決まり、1972(昭和47)年に宮崎県側の日ノ影から高千穂までが開通した。翌年には、熊本県側の全長6,480mの高森トンネルの工事が始まった。

工事中の大量出水

着工から約2年後の1975(昭和50)年2月、高森トンネルの入り口から約2kmの坑内で毎分36tの大量出水があった。それにより、トンネル坑内が水浸しになった一方、高森町中心部の水源が急速に枯れ、出水から2日後には約1,000戸が完全断水となった。この出水をきっかけに、古くから高森地域の産業・経済・文化等を育んできた12水系に及ぶ自然湧水が枯渇し、4,000人の飲料用水、100haの農業用水ならびに工業用水等が甚大な被害を受け、自衛隊の給水を受ける騒ぎとなった。

緊急対策としてトンネルからポンプで水を汲み上げたが、その後も枯れた湧水が潤うことはなく、住民からも不安な声が続いた。断水の1年後には飲料水や農業用水等の



大量出水時のトンネル坑内

応急対策工事が進められた。井戸を試掘したが新たな水脈は確保できず「坑内の出水を揚水し水源とするしかない」と判断された。これによりトンネル工事は中断され、1989(平成元)年まで続くこととなる日本鉄道建設公団との補償交渉が始まった。

これらは当時の新聞でも頻繁に取り上げられていた。新聞記事によると、1975年2月の大量出水以前からトンネル工事では出水があり、高森町内では農業用井戸や水源地の水位が下がり始め、町と鉄道建設を行っていた日本鉄道建設公団との間で水問題の協議をしていた矢先の大規模出水であった。当時の住民によると、大量出水の半年ほど前から給水制限が度々あり、急に水が出なくなった民家もあったようだ。揚水工事では人出不足やポンプ故障



大量出水時の新聞記事

によりさらに復旧が遅れて住民の不満は溜まる一方であった。

国鉄再建法の影響

補償交渉が続き、高千穂線建設の計画自体が廃止の方向へ向かう中、1980（昭和55）年に『日本国有鉄道経営再建推進特別措置法案（国鉄再建法案）』が法律化された。この法案により、全国的に進んだ鉄道離れや国鉄の経営悪化という時代背景から、赤字が予想される地方ローカル線は第3セクターによる運営、あるいは代替交通に移行する方針が決定された。

これにより、高千穂線は鉄道からバス等の自動車運送が適当であるという地方交通線の基準に該当し、特定地方交通線として廃止案が出されることとなった。しかし既存開業区間は、地元の強い要望によって高千穂鉄道と南阿蘇鉄道に分かれて、それぞれ第3セクターの運営に転換された。これらの背景から、補償問題を残したまま、整備途中であった高森～高千穂間の鉄道新線建設の工事は再開されることはなかった。よって高森トンネルに鉄道が通ることもなくなったのである。

補償問題の解決

鉄道整備がとん挫し、補償問題が長引いたことにより日本国有鉄道にとっては負の財産となった高森トンネルは、民営化に伴い1987（昭和62）年に、土地および周辺工作物が日本国有鉄道清算事業団に

渡ることとなった。その後も補償問題は続いたが、約15年に及ぶ慎重な論議により、1989年9月になってやっと解決に至った。

補償内容は、高森トンネルの湧水を利用した補償施設の整備及び補償費を受け、高森町の管理運営のもとで飲料用水や農業用水等、湧水前のような機能充実が図られるよう揚水を行うというものである。水はトンネル内の複数の出水箇所から貯水池等へ送水されることとなった。

残されたトンネルの活用

残されたトンネル入り口から出水箇所までの工作物および鉄道敷地については、1992（平成4）年10月に日本鉄道清算事業団から湧水対策施設用地として高森町が無償で譲り受けた。湧水被害を受けた高森地域の配水整備と共に、公園としての整備が進められることとなった。

公園整備にあたっては、譲り受けた鉄道用地ならびに水辺親水空間を利用し、トンネルの歴史、水の大切さを啓発する学習の場や、地域住民の交流の場の提供を図るとともに、地域活性化に資する観光施設としての利用増大を目指している。

地域のランドマーク

高森湧水トンネル公園では、年次計画をもとに公園の一体的な整備充実を図ってきた。水の資料館「湧水館」の建設、駐車場、トンネル内歩道、照明施設、調整池、公園緑化などである。その結果、来園



トンネル坑内の「ウォーターパール」



トンネル坑内の「七夕飾り」

者の安全確保が図られるようになり、一般に公開することが可能となった。1996（平成8）年度から本格的に広報周知を図ったところ、トンネル内の公園という特異性から、全国的にも珍しい観光施設として注目されるようになった。

トンネル坑内は年間を通して気温が17℃と過ごしやすいため、夏はひんやりと涼しく冬は暖かい特徴を生かし、様々な展示やイベントが続けられている。常設の見どころでは、前述の「ウォーターパール」だけでなく、魚が泳ぐ池があったり多種多様なイルミネーションが広く施されていたりと趣向が凝らされ、7月の「七夕まつり」や12月の「クリスマスファンタジー」など、季節のイベントは高森町の風物詩となった。

七夕まつりでは、近隣の学校や施設、企業から毎年多くの参加者が集まり、数十基の七夕飾りが展示される。クリスマスファンタジーでも同様に、オリジナルのクリスマスツリーたちが天井から吊るされ、真下を流れる水路の水面に映るイルミネーションも楽しみの一つである。また、トンネル坑口手前の広場ではヤマメのつかみ取り大会が開催され、地元の親子連れをはじめ多くの方に親しまれている。さらに、2020（令和2）年には熊本県出身の尾田栄一郎氏の人気漫画『ONE PIECE』とコラボし、漫画のキャラクター像が設置されるなど話題に事欠かない。

水の資料館「湧水館」の前には、湧水を提供する無料の水汲み場が設置されている。この湧水は口コミにより水のおいしさが広がり、遠方からも水を汲みにわざわざ足を運ぶ人がいるほどである。



坑口直上にある水汲み場と「湧水館」

大量出水に見舞われ、工事もとん挫となり、補償問題も解決までに時間を要し、住民の生活に多大な影響を及ぼした高森トンネルは、公園として地域資源となるだけでなく、観光資源として多くの人が高森町に来るきっかけの一つとなった。

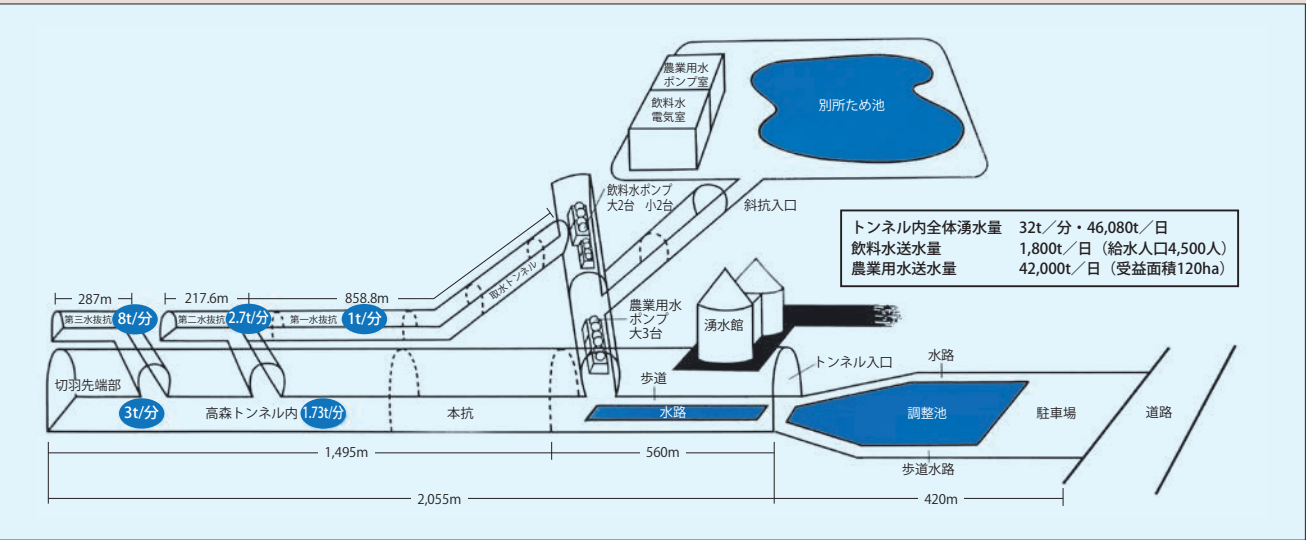
今後も、全国でも類いまれなトンネルと湧水を最大限に利活用した魅力あふれる公園づくりを期待したい。

<取材協力・資料提供>

- 1) 高森町役場 政策推進課 商工観光係
- 2) 高森町湧水館

<写真提供>

- P12上、P13上左、P13下右写真：井村優花
P13下左写真：高森町
P15上左、P15中写真：塚本敏行
P15上右写真：谷口史記



高森湧水トンネル概略図（現地の解説板より）